

文 学 論

広 津 和 郎

平野謙編集



筑摩叢書 215

筑摩叢書 215

文 学 論

広津和郎
平野謙編集

筑摩書房

広津和郎 (ひろつ かずお)

1891年 東京に生まれる

1913年 早稲田大学英文科卒業

1953年 「松川裁判」批判始める

1968年 腎不全で急逝

著 書 「広津和郎全集」(全13巻)

文学論

筑摩叢書 215

1975年 7月 5日 初版第1刷発行

著 者 広 津 和 郎

発 行 者 井 上 達 三

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8

電話 東京 (291) 7651 番 (代表)

振 替 東 京 6-4123 番

郵 便 番 号 101-91

©1975 Printed in Japan

〔分類〕1095〔製品〕01215〔出版社〕4604

厚徳社印刷・永興舎製本

目次

I

チエエホフの強み

九

再び散文芸術の位置について

一〇三

トルストイとチエーホフ

二三

芸術派文学考察

一二五

怒れるトルストイ

二五

「小説は文学ではない」について

一三〇

生の論理・死の論理

二七

散文精神について（講演メモ）

一三二

虚無からの創造

二九

散文精神について

一三三

民衆は何故トルストイと袂別したか

七一

散文芸術諸問題

一三七

カミュの「異邦人」

七四

再び散文精神について

一三九

再び「異邦人」について

七九

III

II

正宗白鳥小論

一四一

散文芸術の位置

七七

二葉亭のリアリズム

一四六

「田園の憂鬱」の作者	一五	藤村覚え書	三三
志賀直哉論	一六〇	秋声文学小論	三三
二葉亭を想う	一七一	徳田秋声論	三七
「愛慾」と「人を殺したが……」	一七六	「うつりかはり」と「思ひ川」	三七
志賀君に、その他	一八四	正宗さんの「アーメン」について	二六〇
「白霧」その他	一八七	Ⅳ	
「点鬼簿」と「歯車」	一九七	自由と責任とについての考察	二六五
荒畑氏の遺書	二〇一	蚤と鶏	二六九
犀星の暫定的リアリズム	二〇四	性格破産者のために	二九三
秋声と白鳥	二一〇	「二人の不幸者」序文	二九四
美しき作家	二一六	菊池寛氏に答う	二九七
中野重治の表現	三三〇	沖縄青年同盟よりの抗議書	三〇三

文芸時評序論	三三
わが心を語る	三七
人物のステロタイプ化について	三八
一本の糸	三三
熱海にて	三四
これからの文学	四六
解説	三五
平野 謙	三五
初稿発表誌紙一覧	七三

文学論

I

チェエホフの強み

トルストイは人も知る如く大変チェエホフを愛していた。ツルゲエネフやその他の作者よりも余程チェエホフを愛していた。(ゴリキイの書いたものの中にも、トルストイが如何にチェエホフを愛していたかが語られている) チェエホフの「可愛い女」を評して、「これは実に真珠の如き文字だ。女の愛の天性が何と微細に捉えられたものだろう。そして文章も非常に佳い。我々のうち誰でも、ドストイェフスキイであれ、ツルゲエネフであれ、ガンチャロフであれ、また私であれ、到底このように書く事は出来ない」と云ったのを見ても、他人の芸術に対して峻厳を極めたトルストイが、チェエホフに対しては如何に愛情を持っていたかが窺われる。

けれどもトルストイは又「併し要するにチェエホフは一

個の写真師に過ぎない」と云って慨嘆している。

これはトルストイのような人間から見たなら、チェエホフが一個の写真師に過ぎないと見えたのも、まことに無理ではないと思う。何故なら、トルストイのような人生に範疇を作らずにいられない人間に取って、チェエホフの如く人生に範疇を作る事を好まない人間のほんとうの素質が理解出来るものではないからである。

チェエホフは果して一個の写真師に過ぎなかったであろうか。これは重要な課題である。

チェエホフの真の偉さは範疇を作らなかつたと云う点に在る。彼は人生を円の中にも角の中にも入れ込もうとはしなかつた。彼は人生を愛した。併し彼は盲目にはならなかつた。何故なら彼はセンチメンタルな分子を少しも持っていなかつたから。彼は聡明であつた。驚くばかり聡明であつた。彼は人間の喜劇をも悲劇をもあるが儘に見た。そのどん底までをも解剖し、而もそれを常に愛を以て描いていた。併し彼はフランスの自然主義の作家のように科学的人生観——これは仮定の上に立った空想的な人生観だ——から出発したがための傍観的態度を持しているのではなかつた。彼の人生に対する態度は彼の靈魂そのものから出発しているのであつた。——彼のメスの鋭さは古今独歩であ

る。彼とよく比較されるモオパッサンも、彼程に鋭くはなかった。チェエホフから見るとモオパッサンは余程感激家であつた。モオパッサンは人生から或物を発見した。そしてその発見に対しても動もすると感激してしまつた。感激すると共にその眼が鈍つた。だからモオパッサンには盲断があつた。チェエホフも亦人生からいろいろなものを発見した。併し彼には「発見のための発見」は少しもなかった。彼の靈魂は発見の稀らしさのために直ぐ感激したり濁されたりするには、余りにおちつきと聡明とを持っていた。

チェエホフ程彼の住んでいた当時の露西亜を根本から理解した作家はなかった。そして彼が当時の到底救う事の出来ない露西亜の消極的廢滅の病原菌として発見したものは、社会状態の不幸と云う事でもなければ政府の圧迫と云う事でもなく、もっと根本的な、人間の性格の廢滅と云う事であつた。彼は或人から、「現代露西亜が最も要求すべきものは何か？」と訊ねられた時、その間に直接には答えずに、「現代露西亜の最大不幸は性格の破産だ」と云つた。性格の破産！これはチェエホフの見た当時の露西亜の墮落の病原菌だったのである。

だからチェエホフの見た人間には統一された性格の厚みはなかった。チェエホフの作中に出て来る人物は、男も女

もみんなしっかりした性格を持っていない。彼等は唯神經の暗示のままに動いていた。神經の暗示のままに、泣いたり笑つたり、悲しんだり、喜んだりして、さまざまの悲劇喜劇を演じている。作家のそれに対する批判と深い愛とは、一種特別なユウモラスな気分、いわゆるチェエホフ式気分を構成して、彼の作に何とも云われない淋しいような、温いような、頼りないような、それでいて何処までも見捨てずにがんばっているような味を加えている。

彼は自分の周囲の人間が、そのような性格破産の墮落状態に陥つた時にさえ、自分自身だけはその流れに巻き込まれない聡明と意思とを持っていた。彼は決して自分を墮落させはしなかった。彼は自力で安心立命の境まで達している。彼は最後に至つても、やさしい微笑を頬に湛えつつ、静かに平和に永遠の眠りに就いた。彼は自力教の徹底者であつた。併し彼はトルストイの云う如く、芸術家として一個の写真師に過ぎなかつたであらうか？ 彼は人生に対して何物をも寛さなかつたであらうか？

先ずそれよりもトルストイの所謂「写真師ならぬ芸術家」とは何であるかと云うに、一語を以てすれば、それは人生に向つてよき教訓を与えるところの作家である、人類を現在の状態よりも更に進歩させるような理想を人生に対

して持っている作家である。

チェエホフは人生に教訓を与えなかったであろうか？

チェエホフは人類の進歩を促すような理想を持っていなかったであろうか？ チェエホフが人間に与えた教訓は非常なものである。彼が先ず人間に与えた教訓の最大なるものは、「正直たれ」と云う事である。彼の作中の何処にもトルストイが述べたような説教の言葉は一語もない。トルストイのように道徳や宗教を決して強いはしない。併し彼の作物の何れの底にも流れている彼の人格は、言葉ならぬ言葉を以て、強迫ならぬ強さを以て、傲慢ならぬ威厳を以て、命令ならぬ微笑を以て、「正直たれ」と読者に向って説いている。「チェエホフの作物に接すると誰でも正直になる。彼は実に立派な天才だ」とは、アルツイバアセフの云った彼に対する尊敬の言葉である。正直に次いで、彼は人間に「謙遜」を教える。それも決して言葉で教えるのではない。チェエホフの作物はまるで心の照魔鏡のように、人の魂に反省を与える。えらがつたり英雄がつたりする人物は、その不自然な姿をそのままチェエホフの照魔鏡に照らされる。眉に皺を寄せて、肩をいからしている連中はその滑稽な姿をチェエホフの照魔鏡にそのまま写される。或人間がチェエホフに向って、「私は幸福だ」と云うと、チェエホフは

その「幸福」の底を一眼で見抜いてしまう。そして「餌を食った鳥でも幸福でしょう」と答える。又他の者が「私は不幸だ」と云えば、彼は直ちにその「不幸」の底をも見抜いてしまう。そして「肥り過ぎた家鴨でも不幸でしょう」と答える。彼は人の心に食い入っているさまざまな「虚偽」に対して、一步も容赦しない。彼は人生の曠野から虚偽を狩り立てて行く。如何に錦を着ても、黄金の褥に横わっても、高位高官に就いていても、結局「豚は豚である」事を彼はちゃんと見抜いているのである。そして而も彼は人生を愛している。人間を愛している。無智な凡俗をも愛している。「いや、さア、それは勿論そうです。併しまあそんなに荒立てなくとも……結局はこんなものなんですから」と絶えず何者かに向って弁解してでもいるように、彼はやさしく、深切に、弱い民衆をかばっている。とは云え、チェエホフは決して教訓を目的としてはいない。彼自身は何処までも芸術家である。教訓は彼の作物から流れ出る人格の光である。それが総ての人間に自省を与えて行くのである。——そして此処に最も興味のある事は、チェエホフのように決して人を叱る事なく唯自然に人の心に自省を与えて行く作者と、トルストイのように教を以て人生におつかぶせて行く作者と、果してどちらがより多くその効果を

上げ得るだらうかと云う事である。併しこれは軽々しく断じ得べき問題ではない。

此処に一つの例を引く。或女が金を沢山持っている。彼女は其の金をもつていろいろの慈善事業などをして、自分では質素に暮らしている。ほんとうに立派な行爲をしているのである。だが彼女は憂鬱である。人生が侘しくて物足りなくて苛々する。何故だか知らないが、どんなに善い行をしても善い行をしても、自分自身は益々つまらなく不幸になつて行くような気がする。彼女はそれを歎いている。チエエホフはこう云う女に心から同情した。彼は何とかしてこうした女を幸福にしてやりたいと思つた。そして彼はその女に仕えている老婢の口を藉りて、「あなたは結婚なさい。あなたは大変お金持でいらっしゃる。あなたが結婚なさる事は決して道に外れた事ではありません。……もし結婚がお厭ならば、兎に角綺麗な男をお持ちなさい。あなたはお金持です。決して道に外れた事ではありません。もしその男にお飽きになったならば少しお金を与えて何時でも別れておしまいなさい。あなたはお金持です。決して道に外れた事ではありません。世間の者は決してあなたを非難など致しはしません。あなたはお金持なのですから……」と。——これにはチエエホフが如何に人間の虚偽を見逃さ

ないかと云う事と、人を見て道を説く彼の聖者的な風格と、そして彼の人間に対する深い愛と同情とが現われている。

若しトルストイがこの女を見たらどんな事をしたらう？ 彼は直ちに彼女を修道院に入れたに違いない。修道院が彼女を救うべき場だと思つたに違いない。そして修道院に投げ込んで置いてから随かに彼女を救つたと思うに違いない。……道德家の愛はこうした形に現われるのが常である……

トルストイ的傾向の人間は何時でも群衆に依つて英雄視される。且つ自分自身も他に向つて自己の偉大を強いている。チエエホフ的傾向の作者は何時でも群衆によつて凡人視される。而も自分でもそれに対して何等の不平をも感じていない。けれども群衆によつて愛され、且つ群衆を愛している。トルストイ的傾向の人は動もすると凡人を暗示にかける。そして肩をいからかす小トルストイを輩出させる。チエエホフ的傾向の人は凡人を暗示にかけない。彼はしづかに凡人と握手し、凡人と一緒に仲よく道を歩いて行く。

トルストイは或ものだ。そしてチエエホフは又他の或ものだ……

トルストイとチェーホフ

一

私はトルストイとチェーホフとを精密に比較し論評したいと以前から思っていた。だから今度本誌の編輯者から、此の両文豪に対する感想を求められた時、此の機会を利用して、日頃の希望を実現したいと思ったのであった。ところがあるく多忙な事があったために、(移転したりしたために)とうとう今日まで材料を集める暇を得られませんでした。

私の手許には今自分の翻訳したチェーホフの短篇集『接吻外八篇』が一冊ある外、両文豪の著作がまるでない。だから此の感想は大体に於いて嘗て読んだ両文豪の著作からの記憶によって述べるものである。従つて妥当の例証を一

一挙げる事が出来ないから、或は多少抽象的になる憾みがないとは云えない。——此の『接吻外八篇』は、私はかなりの抱負を以て訳したものだ。それなのに、チェーホフと云う作家が私が思っている程には日本で尊敬されてないのと、(實際チェーホフは日本では涙と笑との作家であると云われている。露西亜の消極時代を解剖刀を持った外科医のような冷静を以て解剖した作家であると云われている。露西亜に於けるギイ・ド・モウパッサンだと云われている。モウパッサンは肉体が強壮であつたがために、生の享樂を肉体に求めたのに反し、チェーホフは肉体が病弱であつたがために——彼は肺病であつた——生の享樂を精神に、即ち知識慾に求めたと云われている。モウパッサンが運動を盛んに好んだのに反し、チェーホフは読書を盛んに好んだと云われている。そうだ、これ等の評言はみな正しいに違ひない。少くとも誤りでないに違ひない。チェーホフの特色をよく説明しているに違ひない。併しチェーホフにはそれ以外に、それ以上に、もっと何物かゝなかつたか? それ等のものよりもっと重大な、それ等のものゝ特色の根本とも云うべき或る物がなかつたか? ——その点に至ると、私の知っている限りでは、我日本では何人もそれに云い及ぼうとしていない。)出版の時機が悪かつ

たのと、その売行きの予想が思わしくないのでために出版者が広告を怠り、且つ新聞雑誌に寄贈さえもしなかったのとで、まるで世間の注意を惹かない哀れむべき運命に陥ってしまった。一週間前に東京から訪ねて来た友人が、その『接吻外八篇』が終に夜店にさらされるに至ったと云う報告を私にもたらしした。私は何とも言われぬ淋しい気がした。そしてそれと同時に、一種不思議な微笑の浮ぶのを禁じ得なかった……

私はその『接吻外八篇』の序文に「チェエホフの強み」と云う感想を書いて置いた。それは大変簡単すぎるものではあったけれども、チェエホフの傾向、及び彼が如何にその傾向の徹底者であったかを、かなり明瞭に暗示して置いたつもりである。

私は今他に材料を持っていないから、その「チェエホフの強み」に書いた内容を、多少訂正を加えつゝ再び此処に繰返して説明しようと思う。私のチェエホフに対する解釈の仕方を聞かずに闇に葬らるゝに委せず、それを再び読者の前に呈出して、読者の批判に訴える事は、私の心からの希望であるから。それにチェエホフの事を語り、チェエホフの傾向を述べるためには、彼とまるで正反対の傾向に行つたトルストイを引合いに出す事が便利でもあり、又意味の

ある事でもあるから。そうすればそれが又おのずからトルストイとチェエホフとを比較論評する事にもなるから。

此処に一つ断つて置かなければならないのは、私は今傾向としてはトルストイよりもチェエホフに同感を持つてゐる事である。だから、どっちかと云うとチェエホフの傾向に対する方が、トルストイの傾向に対するよりもより親切になるかも知れない。併しこれはトルストイの人間としての（傾向としてのではない）偉大さに対して、最上の尊敬を払つた上で、私の現在の思想上からトルストイの傾向に対して批評するのであるから、その点を誤解されないように希望する。——何故こんな解り切つた事を断らなければならぬかと云えば、動もすると誤解し易いのが、今の我國の文壇の傾向だからだ。或る人々は自分が弱小であると言ふ自意識のために、偉大な人を批評解剖する事を避けようとする。そして偉大な人の欠点を見るよりも、その偉大な人の偉大さのみを求めて、それによって自己を育てる肥料としようとする。これは甚だ謙遜であるには違ひない。聰明であるには違ひない。そしてこう云う行方がかなり或る一派の人々の間に勢力を占めてゐるらしい。併し私はそうは思わない。私は偉大な人のほんとの偉大さを認めて尊敬を払つた上で、更に偉大な人の欠点と思われる箇所に對